

I. <論考>

1. オーストラリアにおける「ラグビー」の拡大と分裂

尾崎 正峰

はじめに

文部科学省の科学研究費補助金に基づく研究のため、ほぼ2年ぶりにオーストラリアを訪れた。訪問先の大学のライブラリーで資料検索をして、内容をチェックした後、必要なものはコピーするという、ある意味、単純作業の繰り返しの日々であったが、資料収集としては十分な成果を上げることができた。

夜、宿のアパートメントに戻り、収集した資料の整理に追われる中、「ながら族」的にテレビをつけっ放しにしておいた。スポーツ専門チャンネルに合わせてみると、日本で日常的には見ることが稀な、モータースポーツ、自転車競技、馬術競技、ダーツ、ビリヤード、などの種目が入れ替わり立ち替わり放映されていた。同時に、オーストラリアの人々が熱狂するオーストラリア・フットボールやラグビー・リーグも、試合場面のみならず、ゲーム予測、プレイヤー紹介、等々、手を替え品を替えて、長時間にわたって映像が流し続けられていた。それらの映像は、スポーツそのものとして十分に楽しむことのできるものであったが、同時に、筆者にとってはオーストラリアのスポーツの歴史と現在の特徴が投影されているものとして、多くの関心を喚起させるものであった。

たとえば、現代スポーツを彩る特徴の一つにメディアとの深いつながりがある。メディア側の戦略においてスポーツは「キラー・コンテンツ」として位置づけられるようになって久しい。一方で、スポーツの側もメディアへの露出がその種目の生殺与奪を握るという認識を持つに至っているといえる。そうした構図の中で、スポーツの放映とそ

の組織体制の主導権の獲得をめぐるオーストラリアでは大きな裁判闘争が展開されたほどである。その喧噪を乗り越えた現在、「ローカル」なものが「グローバルな市場」に進出するという構図が、より顕著な形で表れてきているといえる。同時に、バスケットボールなどのアメリカ型の種目の拡大という現象も起きている。グローバル化が進むマルチカルチュラルな社会状況の中で、オーストラリアのスポーツにはアンヴィバレントな性格を有する事象がない交ぜとなっている。

総じて言えば、オーストラリアのスポーツには、その「特殊な」意味合いとともに、現代のスポーツの姿をとらえる上での重要な視点と対象を見いだす「普遍性」が併存しているといえる。

「オーストラリアのスポーツ」研究の視点

筆者がオーストラリアのスポーツに注目したきっかけは、2000年に開催されたシドニー・パラリンピック大会の調査であった。障害を持つ人々のスポーツ、その国際大会の開催とそれを支える国・社会という事象を通して初めて触れる彼の地のスポーツと社会の姿は、その時点ではいまだ感覚的なものが多くを占めていたが、興味惹かれるものがあつた。その後、2002年度、長期在外研究の地としてオーストラリアを選ぶことになった。

在外研究にあたって提示した研究上の視点は以下のものであった⁽¹⁾。

1. オーストラリアのスポーツ政策の変遷
2. 地域コミュニティレベルにおけるスポーツ活動の実態把握
3. 「障害者スポーツ」の政策と実態

4. 「多文化主義」とスポーツ

これらの視点に基づいて、これまでに研究においては、とくに、上記で提示した「多文化主義」の視点とグローバル化というファクターを絡ませることでオーストラリアの社会におけるスポーツのあり様を探る作業を続けてきた⁽²⁾。

その中のテーマからひとつあげるならば、オーストラリアにおける「フットボール」の歴史と現状を探るといふものがある。すでに何度も指摘しているが、オーストラリアには、オーストラリア独自のオーストラリア・フットボール、「世界標準」のサッカー、そして「ラグビー」にはラグビー・ユニオン（以下、ユニオン）とラグビー・リーグ（以下、リーグ）というふたつのコードがあり、しめて4つのフットボール・コード（code）がある。それぞれのコードが独自の歴史を持ち、現在に至るまで活発な活動を展開している⁽³⁾。

そのことは、オーストラリア統計局（Australian Bureau of Statistics）による世論調査の結果からも読み取ることができる（表1、表2、参照）。

「スポーツ参加（するスポーツ）」と「スポーツ観戦（見るスポーツ）」のふたつの数値を比較対照するとき、4つのフットボール・コードそれぞれのオーストラリアにおける位置とその特質が見えてくる。行論から一つだけあげるならば、もっとも「ローカル」なオーストラリア・フットボールの観戦率が最も高く、日本ではなじみの少ないラグビー・リーグが上位に食い込んでいる。しかし、両種目とも「スポーツ参加」の面では非常に低位である。

ひとつの社会の中で、スポーツが興り、定着していく過程には、さまざまな要素が絡み合っていることはいうまでもないことであろう。その意味で、現在のスポーツ事象のありようとその特徴をとらえていくにあたって、歴史的なプロセスを明らかにしていくことが重要である。筆者は、以前、サッカーを対象に分析を行なったが⁽⁴⁾、本稿では、オーストラリアにおける「ラグビー」の開始と拡大からラグビー・リーグの誕生の時点までの歴史的経緯を追うことにする⁽⁵⁾。

表1 オーストラリアにおける人々のスポーツ参加

	男		女		全体	
	1999-2000	2005-2006	1999-2000	2005-2006	1999-2000	2005-2006
全体	58.5	66.0	50.9	65.7	54.7	65.9
上位12種目						
ウォーキング	13.7	16.5	23.8	32.8	18.8	24.7
エアロビクス/フィットネス	7.5	9.4	14.7	15.7	13.9	12.6
スイミング	13.0	8.0	14.7	10.0	13.9	9.0
サイクリング	6.6	8.8	3.3	3.9	4.9	6.3
ゴルフ	15.6	8.8	3.8	2.2	9.6	5.5
テニス	7.5	4.9	7.3	4.7	7.4	4.8
ランニング	6.3	5.4	3.3	3.1	4.7	4.3
サッカー(室内、屋外)	2.8	5.8	0.7	1.9	1.8	3.8
ブッシュ・ウォーキング	-	3.1	-	3.3	-	3.2
クリケット(室内、屋外)	5.0	5.4	0.4	0.4	2.7	2.9
ネットボール	0.8	0.6	4.6	4.8	2.7	2.7
バスケットボール	3.2	2.8	1.3	1.3	2.3	2.1
オーストラリア・フットボール	2.7	3.1	0.1	0.3	1.4	1.7
ラグビー・リーグ	1.2	1.2	0.1	0.0	0.7	0.6
ラグビー・ユニオン	0.6	0.9	0.1	0.1	0.3	0.5
野球	0.3	0.3	-	0.1	0.1	0.2

出典：Australian Bureau of Statistics, cat. No. 4177.0 Participation in Sports and Physical Recreation, Australia 1999-2000、および、2005-06、より作成

表2 オーストラリアにおけるスポーツ観戦

	男		女		全体	
	1999	2005-2006	1999	2005-2006	1999	2005-2006
全体	54.7	51.9	39.8	36.9	47.1	44.3
上位12種目						
オーストラリア・フットボール	20.4	19.2	13.4	12.5	16.8	15.8
競馬	13.1	13.8	10.5	11.2	11.8	12.5
ラグビーリーグ	13.2	12.0	7.0	6.7	10.1	9.3
モーター・スポーツ	14.7	13.0	6.5	5.7	10.6	9.3
クリケット	9.2	7.2	3.6	2.4	6.3	4.8
ラグビー・ユニオン	4.1	5.7	1.9	2.9	3.0	4.3
サッカー	5.4	4.4	2.9	2.6	4.2	3.5
馬具レース	4.1	3.2	3.1	2.3	3.6	2.8
テニス	2.9	1.3	3.0	2.0	3.0	1.7
バスケットボール	3.8	1.7	3.3	1.3	3.5	1.5
ドッグ・レース	2.4	1.8	1.3	1.0	1.9	1.4
ネットボール	0.8	0.7	2.5	1.6	1.7	1.2

出典: Australian Bureau of Statistics, cat. no. 4174.0 Sports Attendance, Australia, 1999、および、2005-06、より作成

オーストラリアにおける「フットボール」の叢生

1770年、ジェイムズ・クックによるオーストラリア大陸の「発見」の後、1788年にアーサー・フィリップ総督に率いられた船団に乗り組んだ人々によって入植が開始される。「未知」で「未開」の地であるオーストラリアが、ヨーロッパの目から見た「世界史」に登場することになったのである。この後のオーストラリアにおけるスポーツの展開は、イギリスからの入植者の中の上層階級の人々によって主に牽引されたが、19世紀を迎える頃には、社会のより幅広い階層にスポーツは広がりを見せていた⁽⁶⁾。

こうしたオーストラリアにおけるスポーツの広がりには、ひとつには、入植後の社会の安定にめどがついたことが大きかったといえる。入植当初、生活基盤の形成こそが第一義の課題であったが、その見通しがある程度つくようになったことによって、ヨーロッパから遠く離れた地におけるエンターテイメントを誰もが求める意識を呼び起こすこととなった。

さらに、イギリスをはじめとするヨーロッパ地域において、いわゆる「近代スポーツ」が展開し

始め、上層階級に集中して初期の段階から、次第に階級・階層を超えて広く人々の間に浸透していったことが、オーストラリアの社会にスポーツが拡大していくことに影響を及ぼしたことが指摘できる。つまり、どのような形にせよ、スポーツという文化に親しみ、参加した経験を持つ人々が社会の中で一定程度の広がりを見せるようになったこと。そのことが、ひいては、支配層であれ、囚人であれ、自由移民であれ、そして、出自の各国・地域がどこであれ、はるばるオーストラリアへ向かい、彼の地を踏んだ人々それぞれが、「文化の手荷物 (cultural baggage)」としてのスポーツを自らの身体に携えてくることにつながった⁽⁷⁾。繰り返して言えば、ヨーロッパ地域における近代スポーツの拡大が、オーストラリアという遠隔の土地においてスポーツが拡大する社会的背景、少なくとも遠因であったといえる。

ただし、この時期のオーストラリアにおけるスポーツはインフォーマルなものであり、記録として残されているものは数少ない。その中で、オーストラリアにおける「フットボール」の歴史をひもとくと、1829年、シドニーのハイパークで兵士たちが娯楽として「フットボール」のゲームを

行なったとする新聞記事が、記録として残っている最初のものである⁽⁸⁾。こうした記録を含めて、19世紀中盤以降、さまざまなルールのヴァリエーションを持ちながら「フットボール」がオーストラリアで行われるようになったと予測することができる⁽⁹⁾。

「ラグビー」の拡大

オーストラリアにおいて、さまざまな形式での「フットボール」が行なわれるようになる中で、「ラグビー」の展開は、オーストラリアがイギリスの植民地であったことから導き出されるひとつの特徴を持っていた。

この時期、入植者の中・上流層の子弟が本国イギリスのイートン校、ハロウ校、ラグビー校などのパブリック・スクールに留学するようになっていた。植民地の支配層にとって、子弟に本国でジェントルマンたる教育を受けさせるという思いは、至極当然のものであった。そして、子弟が赴いたイギリスでは、1840年代以降、ラグビー的なフットボールがパブリック・スクールを中心に拡がりを見せるようになっていた⁽¹⁰⁾。こうした時期、イギリスに渡ったオーストラリアからの「留学生」は、留学中にラグビー的なフットボールを実際にプレイし、その経験を人脈や思い出と共に携えて帰国することとなった。そのことによって、1860年代頃から、ニューサウスウェールズを中心に、ラグビー的なフットボールが富裕層の男性の間で盛んに行なわれるようになったのである。

このように活動が拡がりを見せる中、組織化への動きが表れてくるようになった。より具体的に指摘するならば、愛好者たちの自主的結社であるクラブの結成である。1863年、初のクラブ組織としてシドニー大学クラブが結成された。同クラブは、オーストラリアに寄港するイギリス軍艦の乗組員と「ラグビー」の試合を行なったとされる⁽¹¹⁾。続いて、1865年には、アルバート・クリケット・クラブのメンバーによってシドニー・フットボー

ル・クラブが結成された。同クラブが1865年にハイドパークで開催した試合が、「ラグビー」の試合として記録として残っているオーストラリア最初のものであるといわれる⁽¹²⁾。その後、いくつかのクラブが生まれたが、その中の一つに、1870年に結成されたワラルー（Wallaroo）・クラブがある。このクラブの創設者の一人リチャード・アーノルド（Richard Arnold）は、1860年代にラグビー校に留学していた⁽¹³⁾。また、クラブのメンバーは、最初期のシドニーの私立学校の卒業生たちであった。

こうした状況は、クイーンズランドにおいても同様であった。1880年代初頭、この地域でも「ラグビー」が盛んになったが、その組織者も参加者も上層階層の人々であった⁽¹⁴⁾。

このような、中・上流層によって主導されるという「ラグビー」に刻まれていた階級的性格は、指導者をわざわざイギリス本国から呼び寄せ、私立学校の教育システムの中に冬季のスポーツ種目として「ラグビー」のゲームが組み込まれたことに象徴的に表れていると同時に、この教育システムによって再生産されることとなった。

クラブの結成が続き、いくつものクラブが活動を開始するようになって以後、ひとつのまとまった競技組織を立ち上げる段階となった。1874年、サザン・ラグビー・フットボール・ユニオン（Southern Rugby Football Union、SRU）が結成された。イギリスでラグビー・フットボール・ユニオン（Rugby Football Union、RFU）が結成されたのが1871年であるから、わずか3年後のことである。ここにもイギリスの影響の深さをとらえることができるが⁽¹⁵⁾、競技組織結成の目的はイギリスでのユニオンの結成と同様であったといえる⁽¹⁶⁾。この当時、地域的なヴァリエーション・ルールがあり、クラブごとに異なっていたが、ゲームの時も審判がおらず、異なる地域のクラブ間の試合前にはルールの確認と合意がいちいち必要であった。活動の拡大とともに、ルールが統一されていないため対抗戦を行う上での不都合が意

識され始め、統一ルールを適用する必要性が出てきたのであった。

その後、SRUは加盟クラブ数を増やし、1892年、ニューサウスウェールズ・ラグビー・ユニオン(New South Wales Rugby Union、NSWRU)に改組した。この時期、学生時代に慣れ親しんだ「ラグビー」を続けるために、所有地のあるニューサウスウェールズの地域に戻ってゲームをするようになった⁽¹⁷⁾。その意味で、「ニューサウスウェールズ」への名称変更は、シドニーの周辺の地域を基盤とするチームの増加を表している。19世紀末にはシドニーのクラブ数は79にも及び、シドニー地域における試合開催を独占的に実施するための再組織化の必要性が生じ、1897年、NSWRUとメトロポリタン・ラグビー・ユニオン(Metropolitan Rugby Union、MRU)との提携が行なわれた。

クイーンズランドでも「ラグビー」は拡大していったが、1882年にはニューサウスウェールズとの対抗戦が行なわれた。この時点ではブリスベンには2つのクラブしかなかったが、こうした試合の展開にも刺激され、9年後にはその数は72にまで増加した。このようにクイーンズランドにおける「ラグビー」の拡大は進む中、1886年、セントラル・クイーンズランド・ラグビー・ユニオン(Central Queensland Rugby Union、CQRU)が結成された⁽¹⁸⁾。

以上見てきたように、ニューサウスウェールズとクイーンズランドを中心に多くのクラブが結成され、植民地間の対抗戦までが行われるようになったが、19世紀末までは、「ラグビー」の試合は多くの観客を集めることはなかった。比喩的に言うならば、この時期のオーストラリアの「ラグビー」は「するスポーツ」として人々の間に広まったものであり、「見るスポーツ」としての性格はそれほど強くなかったということである。しかし、それからほどなくして、世紀が変わる頃になると、こうした状況にも変化が現れてきた。

1899年に、イギリスとの最初のテストマッチが

行なわれた。このときの勝利が、オーストラリアの人々にとって「愛国心」的な感情を刺激するものであった⁽¹⁹⁾。また、クラブシステムの転換があった。具体的には、居住地の制限の緩和、つまりある地域(district)に居住することをクラブへの参加条件としていたことを緩和するものであった。このことによって、有能なプレイヤーをクラブに引き込んでいくことがよりやりやすくなった。

こうした状況が重なり合って、「見るスポーツ」としての「ラグビー」の人气が高まっていった。シドニーでの人气の高まりは、1907年のシドニー・クリケット・グラウンドにおけるニューサウスウェールズとニュージーランドとの対抗戦において5万2000人、すなわち当時のシドニーの人口の10分の1に当たる人びとが観客として訪れるほどのものであった。また、1902年から1907年の間に、MRUが主催する試合の入場料収入は、1,336ポンドから4,078ポンドと、3倍以上に拡大した⁽²⁰⁾。

分裂とラグビー・リーグの誕生

前項で見てきたように、19世紀半ば以降、ニューサウスウェールズ、とくにシドニーを中心に「ラグビー」は拡大を続け、各クラブの統合体であり、統一ルールの採用を企図した競技組織の立ち上げも実現した。20世紀を迎える頃からは、「するスポーツ」のみならず「見るスポーツ」としての成功も見せていた。しかし、こうした展開と同時にいくつかの問題を抱え込むことになっていた。

もっとも大きな問題は、プレイヤーに対する金銭的補償をめぐる執行部とプレイヤーとの間の対立であった。NSWRUなどの執行部は従前までと変わらず上層階層の人々によって占められていた一方で、「ラグビー」に参加する人々、とくに試合に出るプレイヤーの出身階層は労働者階級にまで拡大していった。この背景には、1888年から公立学校(state school)の教育システムにも組織として関与するようになり、私立学校へ子弟を通わ

せる経済的余裕のない階層の青少年の中にも、学校時代から「ラグビー」に親しむ人々が出てきたことがある。この結果、ジュニアからシニアに至るまでのクラブにさまざまな階層の人々が参加するようになった。

こうして事情も手伝って、労働者階級のプレイヤーの数が増したことによって、試合中のけがの治療費や試合参加のために仕事を休んだことへの補填（現在の「休業補償」）などの金銭的補償をプレイヤー側は求めるようになっていった。この争点が先鋭化してきた1907年、ユニオンの執行部は、Epping Racecourseを1万5000ポンドで購入した。その購入資金を調達するために運営上の財政が影響を受け、プレイヤーに対する治療費の補助を取りやめ、治療費支払いの責任をプレイヤーが在籍していたクラブに移すことにした⁽²¹⁾。

こうした執行部の対応にプレイヤーたちは不満をつのらせていった。その中の一人に、アレック・バードン (Alec Burdon) という男がいた。彼は理髪師であったが、1907年、試合で負ったけがのために10週間にわたって仕事をすることができなかった。そこで、彼は治療費などの金銭的補償を求めたが拒否された。しかし、この件はこれで決着したわけではなく、彼と同じ境遇にあるプレイヤー仲間でも話し合いがもたれるまでになった。それとちょうど同じ時期、ニュージーランドの「ラグビー」のチーム、オール・ゴールド (All Golds) がオーストラリアに招聘された。このチームはプロであり、このチームのメンバーとバードンたちが会ったことが、新たな「ラグビー」の組織を立ち上げるべく反旗を翻す上での大きな刺激となった。そしてついに、1907年8月8日、シドニーにあるBateman's Crystal Hotelに集ったプレイヤーたちはNSWRUを脱退し、ニューサウスウェールズ・ラグビー・リーグ (New South Wales Rugby Football League, NSWR L) を結成する行動に出た⁽²²⁾。

「ラグビー」におけるユニオンとリーグの分裂は、1895年8月、本家イギリスでも起こってい

た⁽²³⁾。1901年にオーストラリアが連邦政府を樹立したとはいえ、宗主国イギリスの影響がいまだ大きかった時代背景をふまえたとしても、イギリスとオーストラリア両国におけるユニオンとリーグの分裂は不思議な符号ということもできなくはないと思われる。しかし、執行部とプレイヤーの対立に端を発するユニオンとリーグの分裂が、アマチュアリズムをめぐる理念上の対立であったことから、歴史的に見るならば、起こるべくして起こった出来事ととらえることもできる。

アマチュアリズムは支配層によって作られたイデオロギーであるが、イギリスによる入植当初、オーストラリアではスポーツをイベント興行として商業ベースで展開することも珍しいものではなかった⁽²⁴⁾。その後、スポーツ参加における社会階層の拡大が如実になってくると、階級間の境を明確にすること、そのためのイデオロギーとしてのアマチュアリズムの意味がオーストラリアのスポーツ界を牛耳る層において意識されるようになった。1860年代以降のことである。初期の段階は、会費制などの経済的障壁を設けることで労働者を排除してきたが、それでも労働者階級の参加を阻止することはできなくなった。その段階を迎えて、スポーツ場面においていかなる金銭的やりとりも認めないというイデオロギー性がより強固に打ち出されるに至ったのであった⁽²⁵⁾。

こうした経緯をふまえると、ユニオンとリーグの分裂は、世紀の変わり目を経て、スポーツのあり方の変容、ある意味での「近代化」を迎える時期を表象する出来事といえる⁽²⁶⁾。

しかし、ユニオンの執行部に象徴される社会の上層部の人々のアマチュアリズムへの信奉は、1908年、ニューサウスウェールズ・アマチュア・スポーツ連盟 (Amateur Sports Federation of New South Wales) の結成という形をとることになった⁽²⁷⁾。NSWR Lへの対抗という意味合いをもつものであったが、アマチュアリズムをめぐる対立は、これ以後も続くことになる。そして、この問題はオーストラリアにとどまるものではなく、

たとえば、1974年のIOC総会でオリンピック憲章から「アマチュア」の語が削除される時期まで争点となるものであるといえる⁽²⁸⁾。

ユニオンの勢力がいまだ絶大な中で新たな船出をした新生ラグビー・リーグは、1908年の末に「カンガルーズ」のニックネームで知られるリーグのチーム初のイギリス・ツアーを行なった。このツアーは観客を十分に集めることができず、興行的には失敗で、リーグは、その船出の時点では苦難の先行きを予感させた。しかし、その後の展開は現代につながる特質の胎動を示すものであり、その点についての検討は今後の課題としたい⁽²⁹⁾。

【注】

(1)尾崎正峰『『オーストラリアのスポーツと社会』研究の視座』『研究年報 2002』一橋大学スポーツ科学研究室、2002。

(2)ここでの注で掲げたもの以外で主なものとしては、以下のものがある。

*「進化するオーストラリアのスポーツ研究」『一橋大学スポーツ研究』Vol.22、一橋大学スポーツ科学研究室、2003。

*『寛容のレシピ』—マルチカルチュラルなオーストラリアで感じたこと』『月刊社会教育』2004年5月号、国土社。

*「オーストラリア・スポーツ見聞録」『月刊社会教育』2004年10月号、国土社。

*「オーストラリアのスポーツ政策の“源流”—「ブルームフィールド報告」で示されているもの」『一橋大学スポーツ研究』Vol.23、一橋大学スポーツ科学研究室、2004。

*「オーストラリアのスポーツ政策研究の現状と課題」『一橋論叢』2004年2月号、日本評論社。

*「スポーツ、移民、エスニシティ—オーストラリアの研究動向から」『一橋大学スポーツ研究』Vol.24、一橋大学スポーツ科学研究室、2005。

*「ふたつの平等主義神話の交差—オーストラリア・スポーツ・エスニシティ」『西洋史学』通巻231号、日本西洋史学会、2008。

(3)4つのフットボール・コードの歴史の概略とオーストラリアにおける受容の特徴については、尾崎正峰「移民、エスニシティとオーストラリア・スポーツの展開」高津勝・尾崎正峰編著『越境するスポーツ』創文企画、2006、参照。

(4)同上。および、「オーストラリアにおけるサッカーの「プロ化」の動向と背景」『一橋大学スポーツ研究』Vol.25、一橋大学スポーツ科学研究室、2006、など。

(5)以下の叙述における内容の一部は、「楯岡ボールのイレギュラー・バウンド—オーストラリアにおけるラグビー・リーグの誕生と展開」『季刊民族学』通巻130号、千里文化財団、2009、と重複していることをお断りしておく。

(6)Richard Cashman, *Paradise of Sport: The Rise of Organised Sport in Australia*, Oxford University Press, 1995. Wray Vamplew and Brian Stoddart(eds), *Sport in Australia: a social history*, Cambridge University Press, 1994. A. Adair & W. Vamplew, *Sport in Australian History*, 1997, Oxford University Press.

(7)各国・地域からの移民とスポーツの特徴については、P. Mosely, R. Cashman, J. O'Hara and H. Weatherburn (ed.), 1997, *Sporting Immigrants*, Walla Walla Press、参照。また、「文化の手荷物」については、前掲・尾崎正峰「移民、エスニシティとオーストラリア・スポーツの展開」、83～84ページ、参照。

(8)Cashman, op.cit., p.32.

(9)Geoffrey Blainey, *A Game of Our Own: The Origins of Australian Football*, Black Inc., 2003, pp.11-12. この文献や後掲の諸文献に示されているように、オーストラリアにおける「フットボール」という場合、「オーストラリア・フットボール」の検討は重要なものとしてあげられようが、本稿では、「ラグビー」に対象を限定していく。「オーストラリア・フットボール」の検討については他日を期したい。R. Hess & B. Stewart (ed.),

- More than a Game*, Melbourne University Press, 1998. Geoffrey Blainey, *A Game of Our Own*, Black Inc. 2003. Ian Tutner, 'The Emergence of "Aussie Rules"', in R. Cashman and M. McKernan (ed.), *Sport in History*, University of Queensland Press, 1979. Richard Stremski, 'Australian Rules Football', in Wray Vamplew, Katharine Moore, John O'Hara, Richard Cashman and Ian Jobling (eds), *The Oxford companion to Australia sport (Second Edition)*, Oxford University Press, 1994. Bernard Whimpress, 'Australian Football', in Wray Vamplew & Brian Stoddart(eds), op.cit.
- (10) Eric Dunning and Kenneth Sheard, *Barbarians, gentlemen and players: a sociological study of the development of rugby football (Second Edition)*, Routledge, 2005.
- (11) Murray G. Phillips, 'Rugby', in Wray Vamplew & Brian Stoddart(eds), op.cit., pp.193-4.
- (12) Tom Hickie, 'Rugby union', in Wray Vamplew, Katharine Moore, John O'hara, Richard Cashman and Ian Jobling (eds), *The Oxford companion to Australia sport (Second Edition)*, Oxford University Press, 1994, p.367.
- (13) Murray G. Phillips, 'Rugby', op.cit., p.193.
- (14) ibid., p.194.
- (15) 未だ植民地であったオーストラリアと同様の位置にあった、ニュージーランドや南アフリカも後を追うようにユニオンの組織を立ち上げた。また、ウェールズやアイルランドでも組織結成がなされた。Rob Hess and Mathew Nicholson, 'Beyond the Barassi Line: The Origins and Diffusion of Football Codes in Australia', in Bob Stewart (ed.), *The Games are not the Same: The Political Economy of Football in Australia*, Melbourne University Press, 2007, p.54.
- (16) Dunning and Sheard, op.cit.
- (17) 地域 (district) としては、Orange, Bathurst, Mudgee, Goulburn, Maitland, New England, などであった。Murray G. Phillips, 'Rugby', op.cit., p.194.
- (18) ibid., p.195.
- (19) ibid., p.195.
- (20) ibid., p.196.
- (21) ibid., p.197.
- (22) ibid., p.197. Rob Hess and Mathew Nicholson, op.cit., p.55.
- (23) Tony Collins, *Rugby's Great Split: Class, Culture and the Origins of Rugby League Football*, FRANK CASS, 1998.
- (24) Cashman, op.cit., pp.57-68. Booth, D. and C. Tatz, *One-Eyed: A View of Australian Sport*, Allen&Unwin, 2000, pp.68-71.
- (25) ibid.(Cashman), pp.54-71.
- (26) ここで示される問題は、すでに「オーストラリア・フットボール」においても同様に表れており、ユニオンとリーグの分裂に先立つこと11年、1896年10月2日、Victoria Football AssociationからVictoria Football Leagueが分離・独立した。Rob Hess and Mathew Nicholson, op.cit., pp.52-53.
- (27) Murray G. Phillips, 'Rugby', op.cit., p.202.
- (28) 日本では、もう少し後の時期まで「アマチュアリズム」信奉は続いたといえる。
- (29) Ian Heads, *True blue: the story of the NSW Rugby League*, Ironbark Press, 1992. Chris Cunneen, 'Rugby League', in *The Oxford companion to Australia sport (Second Edition)*, Oxford University Press, 1994. Sean Fagan, *The Rugby Rebellion: The Divide of League and Union*, 2005. Chris Cunneen, 'The Rugby War', in R. Cashman and M. McKernan, op.cit. Mary Bushby and Thomas Hickie (eds), *Rugby History*, Australian Society for Sports History, 2007.